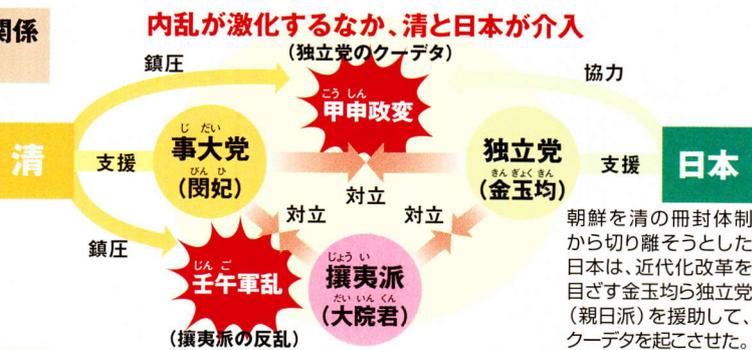


朝鮮半島をめぐる日本と中国が衝突

19世紀後半の朝鮮半島情勢と日清戦争

朝鮮内部の対立関係と清・日本

朝鮮を属国とみなしていた清は、攘夷派の大元君が起こした壬午軍乱を鎮圧し、甲申政変に際しては閔氏ら事大党(親清派)を支援した。



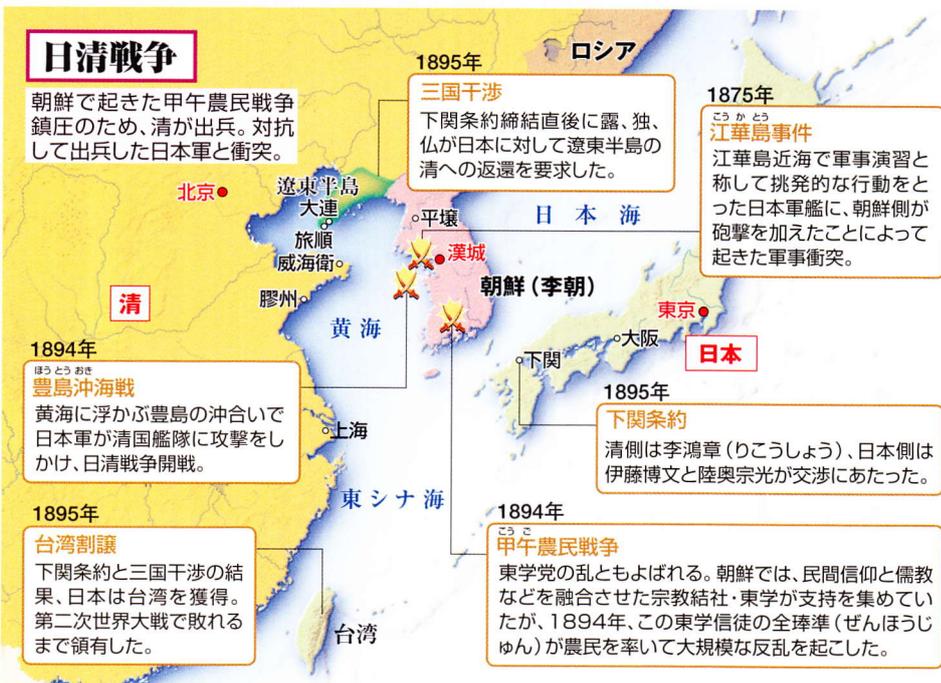
朝鮮と清・日本・ロシアの関係

清を中心とした冊封体制による伝統的中華秩序の維持。



日清戦争

朝鮮で起きた甲午農民戦争鎮圧のため、清が出兵。対抗して出兵した日本軍と衝突。



日清戦争を機に、列強は鉄道敷設権や租借地を獲得して中国を侵略。中国は半植民地化していった。

日本に敗れた清は次々と列強に侵略される

明治維新後、欧米諸国との不平等条約の改正が大きな外交課題となった日本は、列強に不利な植民地獲得を目ざした。当時、李朝(P67参照)の治下にあった朝鮮では、摂政の大元君が鎖国政策を堅持していたが、日本は1875年の江華島事件を機に、翌年日朝修好条規(江華条約)を締結して、朝鮮を開国させた。

朝鮮国内では、閔氏一族など親清派の事大党が清の力を借りて体制の維持を図ったが、金玉均ら親日派の独立党が84年に甲申政変を起こすなど、内政は不安定であった。そして、94年に甲午農民戦争(東学党の乱)が起こり、鎮圧のために清軍が出兵すると、対抗して日本も出兵。両国が衝突して日清戦争に発展した。この戦争に勝利した日本は、95年に清と下関条約を結び、多額の賠償金のほか遼東半島、台湾などの割譲、列強と同等の通商特権など、多くの権益を獲得したほか、朝鮮の完全独立を認めさせた。一方、朝鮮半島への進出を目ざしていたロシアは、日本の遼東半島領有に反対し、ドイツ、フランスと組んで遼東半島を返還させた(三国干渉)。

それまで「眠れる獅子」といわれていた清だったが、日清戦争の敗北でその弱体ぶりが明らかになると、列強は続々と中国への侵略を開始。ロシアは東清鉄道の敷設権を獲得したほか、遼東半島南部の旅順、大連を租借。ドイツは膠州湾、フランスは広州湾、イギリスも威海衛と九竜半島(新界)を租借した。これにより、日本を含む列強の、中国での勢力図が画定した。

租借地

他国領土の一部を借り受け、統治権などを行使する地を租借地という。割譲とは異なり、期限付きであるが、実質的には割譲と変わらない。19世紀末からはヨーロッパ列強と日本が清国内に多くの租借地を得た。1997年にイギリスが香港を返還、99年にポルトガルがマカオを返還して、ようやく中国国内の租借地が消滅した。

Key Word